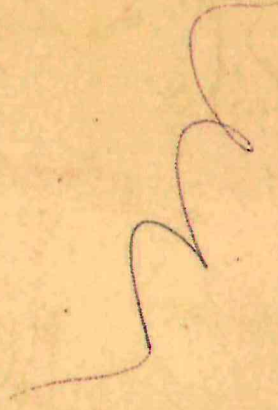


岐阜子ども劇場創立5周年記念号

たかぶえ

—おかあさんのたからもの—
—子ども劇場とわたし—

岐阜子ども劇場



健ちゃんと共に

中² 杉 島 シゲ子

「苦は薬のたね」 その言葉の通り「苦」の経験があつてこそ、生きる喜びと、勇気が湧くのだと思います。

私は、四国の農家に、一男三女の末っ子として生まれましたが、病弱だった母は、私が十八才の時、他界してしまいました。その母の思い出は、ただ、きびしさのみで、あまえた思い出も、やさしくされたことも、心に残っておりません。しかし、私は、二十一才の春、社会人になり、結婚し、子供を育てるようになってから、今は亡き母の、あのきびしさの中から、母としてのやさしさ、思いやりが、わかるようになったのです。

今、こうして年を重ねるにつれ、あのきびしい母があつたからこそ、現在の自分があるのだと、つくづく思えるようになりました。

現在、私は、小学六年生と二年生の男の子に恵まれ、この二人の子どもの成長をたのしみに明けておりましたが、この二年生になる「健ちゃん」が、生後間もなく、「リンパ管腫」という病にかかり、それ以後わが家は一変して、この健ちゃんを中心とした毎日が動き始めたのです。家中の理解と愛情を一身にうけて、この幼い「健ちゃん」のきびしい闘病生活が始まりました。

入院、手術、退院、再入院、と、それはそれはたいへんな毎日でした。当時、三才九カ月だった長

男も、小さいながらもよく協力してくれ、この子の笑顔に、いつも勇気づけられたものです。

どんな苦境にたたされた時も、とに角、がんばらなくては、悔いだけは残したくない、精一杯、この子のためにがんばろうと、いつも家中ではげましあいました。

こうした生活のうちにも、病気のことを中心として、次から次へと苦は色を変えて、私を窮境に追い込むのです。

そうした親の悲しみをよそに、健ちゃんは、思いのほか強い足どりで、スタスタと人生を歩みはじめているのです。

一年八カ月ものあいだ、自分で呼吸をすることも、自分の口でミルクをのむこともできなかった健ちゃんが、奇跡的に、ふとしたことを機会に、医療器械にたよらないで、自分で呼吸ができるようになり、自分の足で太陽の下にでられるようになったのは、二才の誕生日を迎える少し前でした。

まだ完全に治癒してなくて、変形したホップを恥かしいと思ふ気もまだなく、近くの公園に遊びにでかけます。

この頃になって今度は、新たに私は他人の目を気にするようになりました。

今までは、ただ、生きることにだけ、この子を助けることにのみ、必死に耐え生きてきたのに……

しかし、そんな私のきもちをよそに、外にでられるようになった健ちゃんは、無心に外に出たがるのです。その心に負けて、私は、思いきり太陽の下で遊ばせることにしました。そう言ってしまう以外にも簡単にきこえますが、そうするためには、ずいぶん時間もかかり、勇気を必要としたの

です。

いろいろな笑いの声も耳にしました。心ない人々の言葉が私の心を泣かせました。

当時六才になっていた長男が、「お母さん、健ちゃんのことみて笑っているよ」といって、自分の背中で健ちゃんをかばっていてくれたこともありました。

「いいよお兄ちゃん、めずらしいから見てるのよ、まわりの人みんなが健ちゃんのこと知ってくれたら、もうめずらしがらないわ、それまでまつのよ」 そう言って、もうかくすことをやめました。

健ちゃんにはむごいようですが、いつまでもかくしきれるものではありません。健ちゃんが自分自身で耐えてくれるより他に方法はないのです。

外で遊んでいて「変な顔」と笑われても、親である私が、耳をおおいたくなるような悪口を、小さい子ども達からあひせられても、一度も「いじめられた」と泣いてきたことはありません。私は塀のかけからその有様をみても、助け舟を出すことは一度もしませんでした。でもこんな時、健ちゃんは心の中で何を思っていたことでしょうか。それを思うときが、私の一番つらいときでした。

「健ちゃんの病気、お母さんがかわってあげたいわ。」「でもお母さんがこんな病気になると、かわいそう。」と、こんなことを言ってくれるやさしい健ちゃんです。

こんなつよい健ちゃんに、一度だけ泣かれたことがありました。

一日、一日を、ふみしめるように歩むこと六年、学校へ行けるなんて、夢としか思っていなかった入学式に、まわりの人達に祝福されてでかけました。

健康に恵まれず、部屋の中の遊びを強いられていたこの子は、とつても勉強好きな子でしたので、「学校大好き」と、何のまよいももたずにとびこんだ学校でしたが、入学して三日目、学校から帰るなり、「お母さん、ぼくもう学校やめた」と言いました。「きたナ？」と思った私は、それでも平静をよそおって、「どうして？」とたずねて私のひざに座らせ、向かい合いました。大きな涙をポロリとおとしながら、

「今日ね、運動場で八人位の子にいじめられたの、半分ぐらいがまんしてたんやよ、でもあんまり大せいだっから、半分ぐらいのところまできたとき、とうとう泣いてしまったの、もう学校いくのやめやよ。」と私にしがみつくのですね。

私はこのとき、迷いました。どうしよう。つき放そうか？ でも、あんなにつよい子が泣くんだから、余程悲しかったにちがいない、思いきりうけとめてやろう、と思い、

「そう、それはつらかったね、健ちゃんの気持ち、よくわかるわ」といって、二人で思いきり泣きました。

ひとしきり泣いたあと、「お母さん、泣いたのはいしよやよ」と、私に念をおして、まっぴりした顔で公園へ遊びに出かけました。

その夜、担任の先生に、ありのままをお話ししましたところ、ちょうど翌日は、一年生と上級生の対面式の日、断固として行きたがらない健ちゃんに、「今日はきつといいことがあるよ、それも毎日いやなことがあるわけがないもの」と、むりに送り出しました。全校朝礼の際、朝礼台の上に立たせ

ていただいて、担任の先生が、「病気に負けないで元気に入学してきました。いじめないで仲良くしてくださいね」と、お願いしてくださいました。

私はその光景を運動場からじっとみつめていました。その時の担任の先生と、健ちゃん表情を忘れることはできません。

その足で、スポーツ店へ立ち寄り、日頃ほしがっていた皮のグローブをごほうびに買って、じっと健ちゃんの帰りを待っていますと、コトコトとランドセルの音、「ただいま」と朝とはうってかわって元気な声、「これ、ごほうびよ」とさしだすグローブをうれしそうにかかえ、「先生ってお母さんみたいね」と今日のできごとのすべてを語るかのようにして、公園へかけて行きました。

先生のお刀添えによって明るさをとりもどした健ちゃんは、毎日学校がたのしくて仕方がない、という表情で、近所のお友達を待ちきれず一人で早くに出かけるありさまです。

このたくましい健ちゃんをながめながら、子どもって私の宝、苦があつてこそ、生きる喜びの大きさを知る、そのようなことを感じながら、まだまだ大きな壁にぶつかるであろうと予想しながらも、平然とそれになら向かうことのできる自分を、むしろ、しあわせにすら思うのです。





素描

八年前、私が大手術室にいた時のことである。頭(けい)部に大きな腫瘍(しゅよう)を患った年俸十八日目の赤ちゃんが入院してきた。腫瘍はくたを圧迫し、呼吸と呼吸が障害されていた。直ちに手術を行った。しかし、腫瘍は深部まで入り込み、手術は難儀を極めた。手術後も一時危篤状態に陥ったが、一月ほどしてようやく元気をとりもどしてくれた。

がんばれ、健ちゃん

その後、母親の涙ぐましい努力により、この子は成長していったのであるが、同時に自分の身体的欠陥(けつげん)を自覚し、人の視線に恥辱を感ずる年ごろになっていった。しかし、この母親は、ともすると陥りがちなひがみや消極的な考えを振り払いつつ、積極的な姿勢でこの子と向きあひ、この子をしてたいに強く成長させていったのである。おそろへこの間に、この親子が受けた試練と努力は、およそ私には想像もつかぬ苦しみがあつたに違ひない。

友 良 木 榎 岐北病院長

お願ひしてほしい」と、申し出たのである。これはあまりにも、この子にとって教育的な方法であつた。

しかし、この母親は、この子、健ちゃんが、たとえ人前で自分の身体的欠陥をさらけ出されたとしても、決してへんげはあつた手ではないと誓じていた。校長先生は決断され、この申し出を實行された。

今、健ちゃんは夜な夜な手をたすきえ、彼の身体的ハンデを克服しつつある。だが、今は、未知の人の視線に健ちゃんの心は痛むのである。その悲しみは、健ちゃんにけしかわらないであらう。だが、それでもなお、その悲しみを乗り越えて、健ちゃんがより強く成長してついでに、この世を、かつての手術室のある私ばかりが願ひてもよい。

当時私は、この子の母を慰めたことだけで、喜びを感ずっていた。だがこの子は、頑固に大金な手術料と、その後行ったコバルト照射の苦役を、さらに食べたり、話したりする運動機能に障害が戻つてきた。

大のん 大のん 頁 頁 頁 頁 頁 頁
即の初之序と書

此之新編の本文は、古くは
神皇正統記の意義を明瞭に
書き加へたる格に、合評の
外は、

高宗の文に、
一層「建武」の字を、

私は三呼ぶべし、
其の思に、

建武の字を、

高宗 建武 護士

高宗 護士